

主 題：喜んで与える人へと成長する③

聖書箇所：Ⅱコリント9：13－15

テーマ：喜んで与える者としてますます成長していく

今朝、皆さんと続けて見ていきたいのは、Ⅱコリント9章のみことばです。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。私たちはここ二週に渡って、パウロが記したこのコリント人への手紙9章、特に6－15節を通して、「喜んで与える人へと成長する」ということを学んできました。この学びを始めた理由の一つは、来年度から私たちが教会として献金を見直そうとするときに、献金に関してみことばがどんなことを教えているのかを、改めて一緒に見たいと思ったからでした。願わくは、これまで見てきたメッセージを通して、それぞれが自分自身の献金を吟味する励ましと助けになっていれればと思います。でも同時にそれだけが理由ではありませんでした。いやむしろある意味それ以上に、私たちが「喜んで与える」ということを学ぶべき大切な理由があったのです。それは、「私たちの信仰生活」と「与える」ということの間には、深い関係が存在しているということでした。もっと言えば、神様が与えてくださったお金や持ち物、すべてのものを私たちがどのように扱っているのかは、それぞれの霊的状态を明らかにする、というのです。何に優先順位をおいているのか、何を一番に愛しているのか、何に信頼をおいて歩んでいるのか、そのことをささげる姿から見て取ることができるという訳でした。願わくは、この点に関してこれまでのみことばを通してそれぞれにはっきりと示されていれればと思います。

皆さん、私たちにとって、喜んで与える人となっていくことは非常に重要なことでした。確かにそこには難しさが伴うこともあります。でも、何よりも神様がそのことを私たちに望んでおられたのです。そして、パウロのことばを通して、その成長に必要な助けをも私たちに備えてくださっていることを学びました。特に、私たちが与える人として成長しようとするときに覚えるべき六つの動機をここに見ることができました。そのうちの四つはすでに学びましたが、今一度思い返してみてください。

最初の動機として見たのは、「喜んで与える人は神様からの祝福を期待できる」ということでした。惜しみなく種を蒔く者には、惜しみなく神様が報いてくださる、と信頼することができました。主のために豊かにささげる者、それらはすべて決して無駄にはならず、必ず主がそれに報いてくださると期待できることが、一つ目に私たちが覚えるべき動機でした。

次に二つ目の動機として見たのは、「喜んで与える人は神様に喜ばれる」ということでした。喜んで与える人を神様も喜んでくださると。神様は何をどれだけ与えたのかの“量”ではなく、どんな心でささげたかを問われるお方でした。だからこそ、ひとりひとりがいやいやながらでなく、強いられてでもなく、心に決めたとおりにすることが大切だったのです。そのようにして喜んでみずから進んで与える人を神様も喜んでくださるといふ真理、これが二つ目に私たちが覚えるべきことでした。

三つ目の動機として見たのは、「喜んで与える人は神様の恵みに確信をおくことができる」ということでした。喜んで惜しみなく与えるということは、確かに恐れや不安を伴いやすいものでもありました。豊かに与える人には確かになりたいけれど、自分や家族の必要を満たすことができなくなったらどうするのですか？…でも、みことばははっきりと教えていたのです。心配しなくていいと。なぜかと言うと、それは、惜しみなく蒔く者の種を十分に備えてくださるのも、その実を豊かに実らせてくださるのも、すべて全能なる神様の働きだからです。不可能など一つもない神様の働きでした。喜んで与えようとする人物が与えるものに困ることがないようにと、神様は必ずあふれんばかりの恵みを注いでくださるといふこの確信、これが三つ目に私たちが覚えるべきことでした。

そして四つ目の動機として見たのは、「喜んで与える人は神様への感謝を生み出す」ということでした。惜しみなく与えるというのは、その人のうちにだけ喜びをもたらしてそれで終わりではありませんでした。その働きはほかの人々をも豊かにし、彼らと一緒に神様をほめたたえることへと繋がっていくのです。惜しみなく与えることは自分だけでなく、ほかの兄弟姉妹とともに神様を崇めて感謝する機会を生み出していく、それが四つ目に私たちが覚えるべき動機でした。

こうして四つの動機を学んできたのです。きょうは、残された後二つのものを13-15節を通して考えてみたいと思います。喜んで与える人としてますます成長していくために、パウロのことばを続けて見てみましょう。いつものようにまずみことばをお読みしますので、6-15節をもう一度見てください。6節からパウロはこのように記していました。

Ⅱコリント9：6-15

「6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいませ。8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべてのよいわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。9 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりです。10 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。15 ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」

○喜んで与える人へと成長する：六つの動機

5. 喜んで与える人は福音への従順と兄弟愛を証明する 13-14節

さて、五つ目の動機として教えられていたことは、「喜んで与える人は福音への従順と兄弟愛を証明する」ということです。どういうことかが13-14節に記されていました。もう一度見てください。

「13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。」

一体パウロはここで何を言わんとしていたのでしょうか？

●歴史的背景：ユダヤ人と異邦人

▶信仰者の“一致”を望んでおられたイエス様

この部分を正しく理解するためにも、私たちは今一度、歴史的背景というものを振り返ってみる必要があります。特にユダヤ人と異邦人との関係性についてです。皆さん覚えていますか？主がこの地上におられた時、主はご自分の弟子たちのために祈っておられました。弟子たちが一つとなることを主は願っておられたのです。そのことが、ヨハネ17：20-21にこう記されています。「20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。…」もちろん、みこころにかなったこの主の祈りは、その通りになりました。キリストを信じたすべての人は、同じ一つのからだにあって一致する者として召されるようになったのです。どのような人であろうが、一つの主によって、一つの御霊によってみな同じ神の家族に属する者とされました。主はそのようす

ばらしい働きを、確かに成し遂げられたのです。しかし実際の歩みの中ではそううまくはいきませんでした。本来、“一致”が見られるべき教会には、“不一致”というものが生じることがあり、特にユダヤ人と異邦人の間には大きな隔たりが存在していたのです。彼らは互いに妬み合ったり、争いや分裂が起こることもありました。

▶しかし、ユダヤ人と異邦人との間には問題が絶えない…一体なぜ？

一体どうしてそんな隔たりが彼らの間に起こったのでしょうか？その原因も私たちが歴史を振り返ってみればよくわかります。思い返してみてください。旧約聖書を見るとき、神様は最初から、ユダヤ人をご自分の特別な民として選ばれていました。イスラエルの父アブラハムにもこんな約束が与えられていたのです。

*創世記 12 : 3

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」こうして、神様はアブラハムとその子孫を大いに祝福することを約束されました。それは確かです。しかし同時に、神様は、彼らを通してご自身の恵みをこの世界に広めようともされていました。神様の民として特別に選ばれたユダヤ人たちには、神様の恵みをほかの人々へと届ける器としての重大な働きをも与えられていたのです。それが神様のご計画でした。しかし残念ながら、彼らはその本来の責任を果たそうとはしませんでした。彼らは自分たち以外の人々、異邦人に対して神様の恵みを示そうとしないばかりか、自分たちこそが神様に選ばれた特別な存在であるとおごり高ぶり、そうでない人たちを忌みきらっていたのです。これが一般的なユダヤ人が異邦人に対してとっていた態度でした。このような態度というのは、聖書の中でもいくつかのところでその例を見取ることができます。たとえば、旧約時代に登場するヨナもそうでした。

*ヨナ ヨナ 4 : 1-2

ヨナは神様から、「ニネベの町に行って神様のことばを伝えるように」と命じられていました。ここで大切なのは、このニネベの町というのが当時の世界で最も大きい異邦人の都市だったということです。ヨナは神様から、そのニネベに行ってみことばを伝えなさいと言われました。この命令を聞いたヨナは素直に神様に従うのではなく、ニネベとは正反対の方向にあるタルシシュへ逃げて行こうとしました。その後は皆さんもよく知っているとおり、そんな彼は、神様が備えた大きな魚に三日三晩飲み込まれた後吐き出されて、最終的にはニネベに赴いて、町の人々に悔い改めを説いたのです。すると、そのことばを聞いた町の人々は、身分の高い者から身分の低い者に至るまで、神様の前に悔い改めました。すばらしいことが起こりました。しかし、ニネベの町が悔い改めた様子を見たヨナは、そうは思いませんでした。彼の姿がこのようにヨナ 4 : 1-2 に記されています。「:1 ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、:2 【主】に祈って言った。「ああ、【主】よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていたからです。」」ヨナは人々が悔い改めたことを見て、それを怒ってがっかりし失望していました。一体なぜだと思いませんか？それは異邦人であるニネベの人々に神様のさばきが下されるということ、ヨナが望んでいたからでした。彼は自分がニネベの町に行けば、あわれみ深い神様が彼らを赦されると知っていました。救いの神が彼らの上に恵みを示されるということを知っていました。だからこそ、彼はそこに行きたくなかったのです。“異邦人には赦しよりもさばきを”…これが多くのユダヤ人たちが異邦人に対してもっていた態度でした。彼らのプライドというものは、それほどまでに膨れ上がっていたのです。そしてこの現状は、旧約の時代で終わることはありませんでした。新約の時代においても変わらなかったのです。

*ペテロとコルネリオ 使徒 10 : 15

あのペテロですら、始めは異邦人に対して軽蔑の念を抱いていました。彼自身も、汚れた異邦人と一緒に時間を過ごすということは、正しくないと思っていました。だからこそ使徒10章で、彼に対して神様は動物の幻を見せて、10:15「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と教える必要があったのです。その後ペテロはカイザリアに住んでいた異邦人コルネリオのもとを訪ねることになります。そして、彼とその親族に大胆に福音を語ったときに、彼らの上にも聖霊が降ることを目の当たりにしました。ここでもすばらしいことが起こったのです。でもまた問題がありました。その知らせを耳にしたユダヤ人の兄弟たちはそれをよく思わなかったのです。彼らの様子がこのように使徒11:1-3に記されていました。「:1 さて、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということを目にした。:2 そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、:3 「あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らとひとしょに食事をした」と言った。」非難したのです。彼らもペテロと同じでした。神様の救いというものは、異邦人のものではない、異邦人は汚れている…これまでの慣習に倣ってそう考えていました。だからこそ、ペテロはそのように憤る彼らにこう言うのです。同じ11:17で「「…私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることができましよう。」」そのことばを聞いて彼らは沈黙しました。そして続く18節でこう答えるのです。「…「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。」…」と言って、彼らは神様をほめたたえていました。

*エルサレム公会議 使徒15:8-9、11

また最後に、もう一つだけ例を挙げるとするなら、使徒15章に出てくるエルサレム公会議もそうでした。ここでも、一部のユダヤ人たちの間である教えがなされている、ということが問題として取り上げられるのです。どんな教えだったか？それはモーセの慣習に従って割礼を受けなければ人は救われない、というものでした。これも多くのユダヤ人信仰者たちのうちに根付いた考えだったのです。彼らは、異邦人が救われるためには、自分たちと同じようにモーセの律法に従って割礼を受けなければいけない、とそう信じていました。だからこそ、彼らはその教えを人々に強制しようとしたのです。そこでパウロはそのような者たちに向かってこう告げていました。使徒15:8-9、11で「:8 …人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためのあかしをし、:9 私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」「:11 私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」

こうして私たちが歴史を振り返ってみれば、ユダヤ人と異邦人との間にはいつも大きな隔たりが存在していました。「人はみな、信仰によって、恵みによって、キリストによってのみ救われる」という教えを聞きそれを受け入れていたとしても、これまでの慣習や教えが妨げとなって、教会には争いや分裂が生まれていたのです。一つとなることには大きな難しさが伴っていました。

では皆さん、この背景を覚えた上で、今回私たちが見ているコリント教会のことを改めて考えてみてください。パウロはエルサレム教会のために、コリントやマケドニヤを含めてさまざまな教会から献金を募っていました。言い換えれば、苦しんでいるユダヤ人クリスチャンたちのために、異邦人の兄弟姉妹から贈り物としてのお金を集めていたということです。だから前回も言いましたが、コリントの人たちは献金をしないためのさまざまな口実を持ち出すことができました。彼らはこう言えたのです。私たちはエルサレムの兄弟姉妹なんてこれまで会ったこともないし、彼らの苦しみなんて知りません、ましてや私たちのような異邦人をよく思っていないあのユダヤ人たちでしょ？彼らのために私たちが犠牲を払って喜んで与える必要なんてありません…と。また受ける側のエルサレムの兄弟姉妹のことを考えてみても、彼らも色々な疑問や葛藤を覚えていたと思いませんか？パウロは私たちのための献金を異邦人の教会から集めると言っていたけれど、本当に彼らからそのようなものが来るのだろうか？顔も知らない

し会ったこともないし、そんな異邦人の兄弟たちから私たちのような者に愛が示されるのだろうか…と。色々な思いや難しさがそこに存在していたということは容易に想像ができます。でも、だからこそパウロは13-14節のみことばをコリントの兄弟姉妹に向かって送るのです。もう一度13-14節を見てください。「:13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。:14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。」

●二つの大切なことば 13-14節

ここで大きく二つの大切なことが言われていました。特に二つのことばに注目してみてください。

1) 「従順」 13節

まず一つ目にパウロは13節で「従順」ということばを用いていました。この「従順」ということばは、何かに対して服従している状態、自分自身を支配者とするのではなく、何かを委ねて従っている状態を意味しています。パウロ13節で、コリントの人々が「キリストの福音の告白に対して従順」だと言いました。つまり彼らは、救いをもたらすキリストの福音をただ信じて口で告白して終わりではなく、その告白が彼らのうちに従順を生み出していた、ということです。コリントの人々の信仰は、口先だけの死んだものではありませんでした。彼らの信仰が生きていたものであるからこそ、惜しみなく与えるという行いを通して、それが本物であると証明されるわけです。ちょっと混乱している方もあるかもしれませんが、考えてみてください。先ほども述べたように、ユダヤ人クリスチャンたちは、これまで異邦人の信仰に対して疑念を抱いていたのです。彼らの救いが本物かどうかを疑っていました。しかしそんなエルサレム教会のもとに献金が届けられたとしたら、ましてや異邦人の教会からそれが届けられたのだということを知れば、どうなると思います？間違いなく彼らは、その異邦人たちの信仰が本物であるということを知るのです。パウロは私たちのもとに献金を届けてくれました。でも聞きました？これは顔も知らない会ったこともないそんな異邦人の兄弟姉妹が、苦しむ私たちを思って喜んで与えてくれたそんな献金だそうです。同じ主を愛する者たちが惜しみなくささげてくれた贈り物なんだって…信じられますか？なんてすばらしい愛なのでしょう！…そのようにして、コリントの人々が払ってくれた犠牲を覚えるときに、エルサレム教会は、彼らの信仰がただ口先だけのものではない真実のものであることを目の当たりにして、彼らのことで神様に感謝をささげるようになるのです。確かに私たちの主は、ユダヤ人であろうが異邦人であろうが関係なく恵みによって救いを与え、その者のうちに働かれる力ある救いの神様なのだ。だからパウロにとって喜んで惜しみなく与えるというのは、その人の信仰が生きて働く本物の信仰であることを証明する一つのあかしとなるものだ、と考えていたということです。キリストの福音に対する真の信仰は、必ずそれにふさわしい従順な行いの実を結ぶということ、それが大切なポイントでした。

本当の信仰は、必ずそれにふさわしい実を結ぶ。このことに関しては、パウロだけでなく、ヤコブも同じように教えていました。ヤコブ2：14-17「:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。:15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、:16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。:17 それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」もちろん、救いが私たちの行いによってではなく、信仰によってもたらされるというものであることは言うまでもありません。しかし同時に、本当の信仰には必ず良い行いが伴う、ということもみことばは変わらず教えている真理でした。信仰には、キリストへの従順が欠かせないものであり、行いのない信仰は何の役にも立たない、死んだもので

あるのと同じだということです。だからこそ、このように困窮しているエルサレムの兄弟姉妹を助けるために、コリントの人々が喜んで惜しみなくささげるということは非常に重要なことでした。そのすばらしい犠牲的な行いを通して、彼らの信仰告白が口先だけのものではない、本物であることが公に証明されるのです。そして、それを目撃した者たちが、そんな彼らにも救いを与え、恵みによって彼らのうちに働き続けておられる神様の偉大さをますますあがめることへと繋がっていくと。そのことを考えれば、パウロはどうして惜しみなく与えるようにと励ましていたのか、その思いがわかりますね。でも、この箇所では教えられていた大切なことはそれだけではありませんでした。

2) 「慕うようになる」 14節

二つ目に注目して欲しいのは、今度は14節の最後に出てきた「あなたがたを慕うようになる」というところの「慕うようになる」ということばです。この「慕うようになる」ということばには、もともと「何かを強く熱心に願う」とか「心の底から慕い求める」とか「偽りのない愛情を抱く」といった意味があります。パウロは自分自身がローマに投獄されている時、ピリピの兄弟姉妹に心の底から会いたいという強い願いを、このことばを用いて表現していました。ピリピ1：8を見ると、「私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。」とあります。また興味深いことに、ペテロもこのことばを用いて、生まれたばかりの赤ん坊のように人々がみことばの乳を慕い求めなさい、と訴えていました。1ペテロ2：2に「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と書かれています。考えてみてください。牢屋で捉えられている人物が、どうにかして愛する兄弟たちの顔を見たいと願っている様子。赤ん坊がほかの何よりも母親の乳を求めているその様子。それらを思い浮かべれば、この「慕うようになる」ということばがいかに熱心に心の底から求めているかが想像できますね。パウロはそんなことばをこの14節で用いていました。コリントの兄弟姉妹が、いやいやながらも強いられてでもなく喜んでエルサレムの教会に与えるというそのような愛を実践すれば、エルサレムにいる者たちも同じようにコリントの兄弟姉妹のことを心の底から慕うようになる、コリントの人たちが与えれば、エルサレムの兄弟姉妹も同じように彼らのことを愛するようになると、パウロはわかっていたのです。惜しみなく与える兄弟愛というのは、それを受け取る人々の心のうちにも熱心な偽りのない愛情というものを生み出す、ということです。

パウロは、コリントの兄弟たちが惜しみなく与えれば、それが彼ら自身のキリストへの愛が本物であることの証明になると述べて終わりではありませんでした。それと同時に、惜しみなく与えれば彼ら自身の兄弟姉妹に対する愛をも明らかにする、と言うのです。喜んで与える人はその心からキリストへの愛があふれんばかりに流れ出し、それで終わりではなく、受け取る人の心のうちにも流れ込んで、そしてその人のうちにも愛を生み出すと。すばらしいことだと思いませんか？！

こうしてエルサレムの教会は気がつくのです。確かに、かつて私たちは異邦人の救いを疑っていた、でもそれは大いに間違っていた、確かに神様はユダヤ人を始め異邦人にも信じるすべての人に救いを与えられるお方だった、そして、確かに場所は離れているけれども、何より今私たちは同じ主にあつて一つとされているのだと。だから皆さん、喜んで与えるというのは、キリストにあつて一つとされた神の家族が、互いの間で実践できる愛の働きでもあるのです。

きょうの始めにも見たように、私たちの愛する主は、信仰者が“一致”を保って歩いていくことを望んでおられました。私たちが喜んで与える人として成長し、互いに愛を実践するのであれば、その愛がまるで磁石のように互いの間をより強固なものとして結びつけていくのです。そんな経験を皆さんはされたことはありませんか？だれかが自分の必要のために喜んで与えてくれたときに、神様はその人に対して感謝するだけじゃなくて、その人に対する、神様に対する愛が心のうちでもっと生まれてくるのです。そして、自分自身もますます喜んで愛を分かち合う者になっていきたいという願いが生まれてくる

のです。喜んで惜しみなく与えるというのは、このようにして福音への従順と兄弟愛を証明することに繋がるというわけです。そうだとすれば、私たちがどのようにして日々ささげようとしているかを吟味することは非常に大切なこととなります。はたして、私たちの歩みは喜んで与える人としての歩みでしょうか？皆さん、私たちが兄弟姉妹の必要を満たそうと与えるとき、それは自分自身の信仰のあかしとなるだけでなく、何より神の家族である教会に一致をもたらす働きを担っているのだ、ということになるのです。そのような働きを私たちは熱心に求めているでしょうか？

先週も見たように神様は色々なものを恵みによって日々私たちに与えてくださっていました。それはお金や持ち物もそうですが、私たちの時間や私たちのからだもそうです。そしてもし私たちが神様から与えられているそのようなすべてのものを兄弟姉妹と喜んで分かち合うのであれば、それがその交わりを深めることに繋がるというのです。同じキリストを愛する私たちが、互いの間でささげることを通してキリストの愛を実践していけば、その愛のうちにますます一つとされていくのだと。そんな親しい交わりを私たちも持ちたいと思いませんか？神の家族がますます一つとなって、ほかの兄弟姉妹との関係がますます深められていくことを私たち自身も望みませんか？もしそのことを望むのであれば、パウロは教えてくれていました。喜んで惜しみなく与える人として生きていきなさいと。いやいやながら強いられてでもなく心から、キリストが私たちを愛してくださったその愛のゆえに、兄弟姉妹の必要を具体的に満たそうと喜んで互いに仕え合っていくことです。そしてそのときに、私たちは、神様が働いてくださってその交わりが深められていくということを確認することができるのです。喜んで与える人はその行いを通して福音への従順と兄弟愛を証明する、これが成長を目指す私たちが覚えるべき五つ目の動機でした。

6. 喜んで与える人は救い主へと人々を導く 15節

そして最後六つ目の動機として教えられていたことは、「喜んで与える人は救い主へと人々を導く」ということです。言い換えれば、喜んで与える人の動機には、福音伝道がある、ということでしょう？これまで語ってきたことをまとめて最後15節でこんなことばを記していました。

「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」ここでパウロは、「ことばに表せないほどの賜物」という表現を用いていました。この賜物って一体何の何を表しているのでしょうか？ある人たちは文脈からこれを、コリントの教会に対して与えられた神様の恵みであると考えていたり、またその恵みを与えられたコリントの兄弟姉妹がささげる献金であると考えていたりもします。でもはたしてそうなのでしょうか？そうではありません。パウロはここで単に賜物とは言わずに、「ことばに表せないほどの」ということばを加えていました。この「ことば」というのは新約聖書の中でここ以外には出てきません。パウロは、この賜物が人のことばなどでは絶対に言い表すことなどできない素晴らしいものである、とそう述べていたのです。その賜物こそ、救い主イエス・キリストでした。振り返ってみれば、パウロはこれまで、人と人との間の贈り物について教えてきました。コリントの兄弟姉妹に、喜んでエルサレム教会に与えることの大切さを熱く訴えたのです。でもその彼の熱心さというものはそこでとどまることはありませんでした。だからこそ彼は最後に、人々が最も心を留めるべき最も感謝を表すべきそのものへと彼らの目を向けようとするのです。そしてそれこそが、すべての源である父なる神様、またその神様が賜物として贈ってくださった救い主イエス・キリストでした。かつて預言者イザヤも言っていました。イザヤ9：6で「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。…」とヨハネも繰り返し述べていました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

と。またIヨハネ4：9-10でも「:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての神子を遣わされました。ここに愛があるので

す。」またパウロも同じコリントの中ではっきりこう言っていました。Ⅱコリント8：9「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」と。パウロは、神様が与えてくださったこの賜物の偉大さを覚えていました。罪人を救うためこの世に来てくださった神の御子イエス・キリストの姿を心に留めていました。だからこそ言うのです。神様が与えてくださったこの贈り物は人のことばなどで言い表すことなどできないと。どんなことばもそのすばらしさを表現するには足りない。神様は恵みによって最高のギフトを与えてくださった、だから、これほどすばらしい神様に感謝しようと。私たちも立ち止まってよく考えてみなければいけません。永遠に存在しておられ、すべてのものを造られた聖なる神の御子のご自分を無にして人としての性質をもってこの世に現れてくださったのです。そして、本来であれば、この方こそが人に仕えられるべきなのにも関わらず、へりくだって人に仕える者となり、本来であれば、この方が偉大な御力ですべてのことをご自分の意のままにすることができるにも関わらず、人と同じように飢え渴きや弱さを覚えられ、本来であれば、その生涯において一つの過ちや罪など犯さず完全だったこの方が十字架で死ぬ必要などなかったにも関わらず、みずから進んで十字架にかかりのろわれた者となって苦しみ死なれたのです。

一体どうしてこのようなことをなされたのでしょうか？それはほかでもない、私たちがそのような救い主を必要としていたからでした。すべての人が罪を犯し、その罪の中に死んでいた私たちにとって、完全な神であり完全な人である救い主が必要だったのです。この救い主が完全な人であるからこそ、この方が私たちの罪人の身代わりになることができました。この方は、罪は犯されませんでした。すべての点で私たち同じようになってくださり、罪のために流されたその尊い血をもって罪の代価を支払ってくださったのです。ヘブル2：17にも「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。」と書かれています。しかし、この方は完全な人であっただけではなく、同時にこの方は完全な神様でした。この救い主が完全な神様であるからこそ、この方だけが罪に対して、燃え上がる神の御怒りを私たちの代わりとなって耐え忍び、その怒りをなだめることができました。人にはだれひとりとしてそのようなことはできませんでした。神様であるからこそ、それができたのです。そしてこの方が神様であるからこそ、死に勝利して復活されただけでなく、ご自分のもとに悔い改めと信仰をもってやって来る者たちを義とし、永遠のいのちを与えることができました。これこそが、父なる神様が与えてくださった、ことばに表すことのできない賜物でした。私たちが神様を愛したからこの賜物を与えられたわけではありません。私たちが神様に逆らって肉の欲の中を生き、ただ神様の御怒りを受けて滅ぼされるべきそのときに、神様がまず私たちに愛を示してくださったのです。そのようなすばらしい恵みの賜物を与えられたと覚えるときに、ふさわしい応答とは一体何でしょうか？パウロは言っていました。「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」と。

こうして喜んで与えることについてコリントの人々に説いてきたパウロは、最後に彼らの心を救い主に向けていました。それは、彼らが惜しみなくささげるということを考える以前に、彼ら自身が最高の贈り物であるイエス・キリストとその福音を覚える必要があったからでした。信仰者が喜んで与えることの基盤は、ほかの何者でもない救い主イエス・キリストにあるということです。

ですから、もし、きょう皆さんの中で、ことばに表すことのできないこの賜物であるイエス・キリストをご自分の救い主としてまだ受け入れていない方がおられるなら、今なお自分の人生は自分のもの、自分の望むままに生きればよいとそう考え、神様に逆らっている方がいるなら、みことばから私たちが言えること、それは、その道の続く先は永遠の滅びだということです。しかしそんなあなたにもすばらしい知らせがあります。それは罪を心から悔い改めて、キリストを自分の罪のための救いの主と信じ受け入れるのであれば、あなたにも救いが与えられるということです。この主はあわれみの御手を広げ

て、今も招いてくださっています。ですからどうか、きょうという日に、神様が与えてくださったこのことばに表せないほどの贈り物である主イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れてください。

またこの恵みの賜物をもうすでにご自分のものとされている兄弟姉妹の皆さん。私たちが喜んで惜しみなく与えようとするときに、いつも心に留めることです。私たちのようなものに与えられたその最高の贈り物が何かを、です。そして、その最高の贈り物を送ってくださった神様のあわれみ深い姿を心に留めることです。またそれに心に留めるなら、同時に覚えることです。私たちは今、こんなにも大きな愛を示してくださった方、この方の証人として生かされているということ、です。私たちが喜んで与えるときに、人々は私たちを通してその神様の姿を目にするのです。だからこそ、はたして私たちの与える姿は、私たちにあふれんばかりの恵みをもって、ことばに言い表せないほどの賜物を与えてくださった神様のあわれみ深い姿を反映しているかどうか、ということをよく考える必要があります。私たちに救いを備えてくださった神様は、そのためにご自分のひとり子であるイエス・キリストを与えてくださいました。愛のゆえに恵みによって、惜しむことなく神様はそのような賜物を与えてくださったのです。では、その賜物を受け取った私たちは、一体どのような福音を、一体どのような救い主を、一体どのような神様を人々の前で示そうとしているのでしょうか？与えられた者は、どのようにして与える者として生きていこうとするのでしょうか？喜んで与える人はその行いを通して救い主へと人々を導く、これが成長を目指す私たちが覚えるべき六つ目の動機でした。

〇まとめ

さて、私たちは今朝、喜んで与える人へと成長していくために覚えるべき六つの動機の最後の五つ目と六つ目を学びました。五つ目は、「喜んで与える人は福音の従順と兄弟愛を証明する」ということであり、六つ目は、「喜んで与える人は救い主へと人々を導く」ということでした。改めて振り返ってみるとどうでしょうか？はたして私たちひとりひとは神様が求めておられるような、喜んで与える人として今を歩んでいるのでしょうか？

今回、学んだコリントの教会は色々な問題を抱えていました。手紙を送ったとき、彼らは自分たちが以前約束していたそのことば通りには振る舞わずに、エルサレム教会に対する献金の準備に遅れが出ていました。ましてや、彼らのうちにはエルサレムの教会に対して献金をすること自体を躊躇している者まで現れていました。そんな彼らに対して、パウロは喜んで惜しみなくささげるようにと励ましたのです。与えるという働きがいかにすばらしいものなのかを何度も彼らに思い起こさせていました。では、その後、コリントの兄弟姉妹はどうしたと思います？彼らはパウロの教えを無視して結局献金を送らなかったのでしょうか？パウロはこのコリントの手紙を記した後に書いたローマ人への手紙の中で、このようなことばを残していました。ローマ15：26「それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために献金することにしたからです。」アカヤというのはコリントの教会があった地方の名前でした。つまり、彼らは自分たちが以前に約束していた通りに、惜しみなく与えるということを実践したのです。しかも、それを喜んでしたのだと。彼らはパウロのことばを聞いて励まされて、喜んで惜しみなく与えるというその愛を実践しました。

問題は私たちひとりひとりがどうするかです。もちろん私たちは望まないまま犠牲をいっさい払わずに、いやいやながら、だれかに強いられて、恐れや不安を抱いたまま与えることもできます。でもそうではなく、心で決めたものを、ひとりひとりが喜んで、犠牲をいとわずに、惜しみなく、豊かに、感謝と期待にあふれて与えることもできるのです。どちらを選択するかは皆さんそれぞれの決断です。でもこのようにして私たちがみことばを見てきたときに確かに言えるのは、神様は喜んで与える者には必ず報いてくださって、喜んで与える者にはその者を喜んで愛を示してくださって、そして、あふれんばかりの恵みで備えてくださるということです。また喜んで与える者は、自分だけでなく、周りの人にも

神様への感謝を生み出し、兄弟姉妹の間に一致をもたらし、何よりも私たちを救ってくださったその救い主をあかしするというすばらしい働きを担うことができるということです。皆さん、私たちの神様は、ことばに表すことができないほどの賜物を私たちに与えてくださいました。この方はこれほどまでにすばらしいことを成してくださったのです。そうであるなら、この方を愛するからこそ、私たちも神様に対して、また人に対して、喜んで惜しみなく与える者として成長していきたいですね。どんなときも、まず神様がどれほどの愛と恵みをもって私たちに贈り物を与えてくださったのかを忘れないことです。そして、神様のあわれみ深いその姿に心を留めて、この方のすばらしさがただほめたたえられるために喜んで与える人として、互いに仕え合って成長を目指して歩んでいきましょう。